

第7章 3歳児の保育の内容

1 発達の特徴

子どもは、この時期までに、基礎的な運動能力は一応育ち、話し言葉の基礎もでき、食事・排泄などもかなりの程度自立できるようになってくる。

これまでは、何かにつけ保育士に頼り、保育士との関係を中心に行動していた子どもも、一人の独立した存在として行動しようとし、自我がよりはっきりしてくる。

そして、他の子どもとの関係が子どもの生活、特に遊びにとって重要なものとなってくる。他の子どもとの触れ合いの中で、少しずつ友達と分け合ったり、順番を守って遊んだりできるようになる。この段階では、子ども自身は友達と遊んだつもりになっていても、実際にはまだ平行遊びが多い。しかし、この時期に仲間と一緒にいて、その行動を観察し模倣することの喜びを十分に味わうことは、社会性の発達を促し、ひいてはより豊かな人間理解へとつながっていく大切な基礎固めになる。

注意力や観察力はますます伸びて、身の回りの大人の行動や日常経験していることなどを取り入れたりしてごっこ遊びの中に再現するので、これまでのごっこ遊びより組織的になって、遊びの内容にも象徴機能や創造力を発揮した発展性が見られるようになり、遊びがかなりの時間持続する。

この頃、「なぜ」「どうして」などの質問が盛んになり、ものの名称やその機能などを理解しようとする知識欲が強くなり、言葉はますます豊かになってくる。そして、自分の行動や体験を通した現実的で具体的な範囲であれば、「こうするとこうなる」など、あらかじめ、結果について予想をすることができるようになってきて、自分のしようとするにも段々と意図と期待を持って行動できるようになる。また、簡単な話の筋も分かるようになり、話の先を予想したり、自分と同化して考えたりできるようになる。

さらに、この時期には、きまりを守って自分から「…をしよう」という気持ちも現われてきて、「…するつもり」という思いを抱くようになる。また、進んで保育士の手伝いを行ったりするようになり、人の役に立つことに誇りや喜び

を抱くようになる。

2 保育士の姿勢と関わりの視点

心身ともに、めざましい発育・発達を示すときであり、それだけにいていねいな対応が求められる。自我がはっきりしてくるものの、それをうまく表現や行動に表すことができないところもあり、一人一人の発達に注目しながら、優しく受け止める配慮を欠かしてはならない。

3 ねらい

- (1) 保健的で安全な環境をつくり、快適に生活できるようにする。
- (2) 一人一人の子どもの欲求を十分に満たし、生命の保持と情緒の安定を図る。
- (3) 楽しんで食事や間食をとることができるようにする。
- (4) 午睡など適切な休息をとらせ、心身の疲れを癒し、集団生活による緊張を緩和する。
- (5) 食事、排泄、睡眠、衣服の着脱などの生活に必要な基本的な習慣が身につくようにする。
- (6) 外遊びを十分にするなど、遊びの中で体を動かす楽しさを味わう。
- (7) 身近な人と関わり、友達と遊ぶことを楽しむ。
- (8) 身近な動植物や自然事象に親しみ、自然に触れ十分に遊ぶことを楽しむ。
- (9) 身近な社会事象に親しみ、模倣したりして遊ぶことを楽しむ。
- (10) 身近な環境に興味を持ち、自分から関わり、生活を広げていく。
- (11) 生活に必要な言葉がある程度分かり、したいこと、して欲しいことを言葉で表す。
- (12) 絵本、童話、視聴覚教材などを見たり聞いたりして、その内容や面白さを楽しむ。
- (13) 様々なものを見たり触れたりして、面白さ・美しさなどに気づく。
- (14) 感じたことや思ったことを描いたり、歌ったり、体を動かしたりして、自由に表現しようとする。

4 内容

〔基礎的事項〕

- (1) 一人一人の子どもの平常の健康状態や発育・発達状態を把握し、異常を感じる場合は速やかに適切に対応する。また、子どもが自分から体の異常を訴えることができるようにする。
- (2) 施設内の環境保健に十分に留意し、快適に生活できるようにする。
- (3) 一人一人の子どもの気持ちや考えを理解して受容し、保育士との信頼関係の中で、自分の気持ちや考えを安心して表すことができるなど情緒の安定した生活ができるようにする。
- (4) 食事、排泄、睡眠、休息など生理的欲求が適切に満たされ、快適な生活や遊びができるようにする。

「健康」

- (1) 楽しい雰囲気の中で、様々な食べ物を進んで食べようとする。
- (2) 便所には適宜一人で行き、排尿、排便を自分でする。
- (3) 保育士に寄り添ってもらいながら、午睡などの休息を十分にとる。
- (4) 保育士の手助けを受けながら、衣服を自分で着脱する。
- (5) 保育士の手助けにより、自分で手洗いや鼻をかむなどして清潔を保つ。
- (6) 体の異常を、少しは自分から訴える。
- (7) 危ない場所に近づくことが少なくなり、危険な遊びに気づく。
- (8) 外で十分に体を動かしたり、様々な遊具や用具などを使った運動や遊びを楽しむ。

「人間関係」

- (1) 保育士に様々な欲求を受け止めてもらい、保育士に親しみをもち安心感を持って生活する。
- (2) 友達とごっこ遊びなどを楽しむ。
- (3) 遊具や用具などを貸したり借りたり、順番を待ったり交代したりする。
- (4) 簡単なきまりを守る。
- (5) 保育士の手伝いをすることを喜ぶ。

- (6) 遊んだ後の片づけをするようになる。
- (7) 年上の友達と遊んでもらったり、模倣して遊んだりする。
- (8) 地域の人と触れ合うことを喜ぶ。

「環境」

- (1) 身近な動植物をはじめ自然事象をよく見たり、触れたりなどして驚き、親しみを持つ。
- (2) 身近な人々の生活を取り入れたごっこ遊びを楽しむ。
- (3) 自分のものと人のものとの区別を知り、共同のものとの区別にも気づく。
- (4) 身近な事物に関心を持ち、触れたり、集めたり、並べたりして遊ぶ。
- (5) 様々な用具、材料に触れ、それを使って遊びを楽しむ。
- (6) 生活や遊びの中で、身の回りの物の色、数、量、形などに興味を持ち、遠くに気づく。
- (7) 保育所の行事に参加して、喜んだり楽しんだりする。

「言葉」

- (1) あいさつや返事など生活や遊びに必要な言葉を使う。
- (2) 自分の思ったことや感じたことを言葉に表し、保育士や友達と言葉のやりとりを楽しむ。
- (3) 保育士にして欲しいこと、困ったことを言葉で訴える。
- (4) 保育士に、いろいろな場面で、なぜ、どうして、などの質問をする。
- (5) 興味を持った言葉を、面白がって聞いたり言ったりする。
- (6) 絵本や童話などの内容が分かり、イメージを持って楽しんで聞く。
- (7) ごっこ遊びの中で、日常生活での言葉を楽しんで使う。

「表現」

- (1) 身の回りの様々なものの音、色、形、手ざわり、動きなどに気づく。
- (2) 音楽に親しみ、聞いたり、歌ったり、体を動かしたり、簡単なリズム楽器を鳴らしたりして楽しむ。
- (3) 様々な素材や用具を使って、好きなように描いたり、扱ったり、形を作ったりして遊ぶ。

- (4) 動物や乗り物などの動きを模倣して、体で表現する。
- (5) 絵本や童話などに親しみ、興味を持ったことを保育士と一緒に言ったり、歌ったりなど様々に表現して遊ぶ。

5 配慮事項

〔基礎的事項〕

- (1) 一人一人の子どもの平常の健康状態をよく観察し、異常を早く発見できるように注意する。異常を少しでも感じたら速やかに適切な対応をする。
- (2) その時の気候や子どもの状態をよく把握し、気持ちよく活動できるように環境を整える。特に、施設内の採光、換気、保温、清潔など環境保健に配慮する。
- (3) 子どもの気持ちを温かく受容し、やさしく応答し、保育士と一緒にいることで安心できるような関係をつくるように配慮する。

「健康」

- (1) 身の回りのことは一応自分でできるようになるが、自分でしようとする気持ちを大切にしながら、適切な援助をするように配慮する。
- (2) 食事は、摂取量に個人差が生じたり、偏食が出やすいので、一人一人の心身の状態を把握し、楽しい雰囲気の中でとれるように配慮する。
- (3) 用具、遊具などを扱う場合は、特に安全に配慮する。

「人間関係」

- (1) 友達との関係については、保育士や遊具その他のものを仲立ちとして、その関係が持てるように配慮する。
- (2) 初めて集団生活する子どもには、特に心身の疲労を緩和するように配慮し、個別に対応しながら、次第に集団生活に適応できるように他の子どもとの触れ合いの機会を多くするなど配慮する。

「環境」

- (1) 身近の様々なものに興味を持つので、その興味、探索意欲などを十分に満足させるように環境を整え、保健、安全面に留意して意欲的に関われる

ようにする。

- (2) 身の回りの出来事や住んでいる地域の人々の生活が自分の生活と関わりがあることに気づくように配慮する。

「言葉」

- (1) 子どもが保育士に話したいことの意味をくみ取るように努め、話したいという気持ちを十分に満たすことができるように配慮する。
- (2) 絵本や童話、紙芝居などの面白さが分かるように配慮するとともに、生活の中でできるだけ言葉と行動や出来事が結びつくように配慮する。
- (3) 言葉は、聞いて覚えるものであることに着目し、保育士は自らの言葉遣いに配慮する。

「表現」

- (1) 身近なものに直接触れたり扱ったりして、新しいものに驚いたり不思議に思うなど感動する経験が広がるように配慮する。
- (2) 一人一人の子どもの興味や自発性を大切に、自分から表現しようとする気持ちが育つように配慮する。

第8章 4歳児の保育の内容

1 発達の主な特徴

子どもは、この時期、全身のバランスをとる能力が発達し、体の部分がかなり自分の意のままに使えるようになり、体の動きが巧みになる。また、各機能間の分化・統合が進み、話をしながら食べるなど、異なる2種以上の行動を同時にとるようになる。このような過程をたどりながら、全体として一つにまとまり、自我がしっかりと打ち立てられ、自分と他人との区別もはっきりしてくる。

自分以外の人やものをじっくりと見るようになると、逆に見られる自分に気づき、自意識が芽生えてくる。したがって、今までのように無邪気に振る舞うことができない場面も生じる。また、目的を立てて、作ったり、描いたり、行動するようになるので、自分の思ったようにいかないのではないかと不安が生じたり、辛くなったりするなど、葛藤を体験する。このような心の動きを保育士が十分に察して、共感し、ある時は励ますことによって、子どもは、保育士がしたような方法で、他人の心や立場を気遣う感受性を持つことができるようになる。こうして、他人にも目には見えない心のあることを実感し、身近な人の気持ちが分かるようになり、情緒は一段と豊かになる。

この頃の子どもは、心が人のみではなく、他の生き物、さらには、無生物にまでもあると思っている。これが子どもらしい空想力や想像力の展開にもつながる。また、恐れの対象は、大きな音、暗闇など物理的な現象だけでなく、オバケ、夢、一人残されることなど、想像による恐れが増してくる。

この時期の子どもは、人だけではなく、周りのものにも鋭い関心を向け、探索を続けるなど活動的であるので、その過程で他の子どもの興味ある遊びを見たり、自分自身の体験によって土や水をはじめとした自然物や遊具などの自分を取り巻く様々なものの特性を知り、それらとの関わり方、遊び方を豊かに体得していく。その中で、仲間といふことの喜びや楽しさがお互いに感じられるようになり、仲間とのつながりは強まるが、それだけに競争心も起き、けんかも多くなる。一方、この頃になると、仲間の中では、不快なことに直面しても、

少しずつ自分で自分の気持ちを抑えたり、我慢もできるようになってくる。

2 保育士の姿勢と関わりの視点

友達をはじめ人の存在をしっかりと意識できるようになる。友達と一緒に行動することに喜びを見出し、一方で、けんかをはじめ人間関係の葛藤にも悩むときであり、したがって集団生活の展開に特に留意する必要がある。また、心の成長も著しく、自然物への興味・関心を通じた感性の育ちに注目しなければならない。

3. ねらい

- (1) 保健的で安全な環境をつくり、快適に生活できるようにする。
- (2) 一人一人の子どもの欲求を十分に満たし、生命の保持と情緒の安定を図る。
- (3) 友達と一緒に食事をしたり、様々な食べ物を食べる楽しさを味わうようにする。
- (4) 午睡など適切な休息をとらせ、心身の疲れを癒し、集団生活による緊張を緩和する。
- (5) 自分でできることに喜びを持ちながら、健康、安全など生活に必要な基本的な習慣を次第に身につける。
- (6) 身近な遊具や用具を使い、十分に体を動かして遊ぶことを楽しむ。
- (7) 保育士や友達の言うことを理解しようとする。
- (8) 友達とのつながりを広げ、集団で活動することを楽しむ。
- (9) 異年齢の子どもに関心を持ち、関わりを広める。
- (10) 身近な動植物に親しみ、それらに関心や愛情を持つ。
- (11) 身の回りの人々の生活に親しみ、身近な社会の事象に関心を持つ。
- (12) 身近な環境に興味を持ち、自分から関わり、身の回りの事物や数、量、形などに関心を持つ。
- (13) 人の話を聞いたり、自分の経験したことや思っていることを話したりして、言葉で伝える楽しさを味わう。
- (14) 絵本、童話、視聴覚教材などを見たり聞いたりして、イメージを広げ、言葉を豊かにする。

- (15) 身近な事物などに関心を持ち、それらの面白さ、不思議さ、美しさなどに気づく。
- (16) 感じたことや思ったこと、想像したことなどを様々な方法で自由に表現する。

4 内容

〔基礎的事項〕

- (1) 一人一人の子どもの平常の健康状態や発育・発達状態を把握し、異常を感じる場合は速やかに適切な対応をする。また、子どもが自分から体の異常を訴えることができるようにする。
- (2) 施設内の環境保健に十分に留意し、快適に生活できるようにする。
- (3) 一人一人の子どもの気持ちや考えを理解して受容し、保育士との信頼関係の中で、自分の気持ちや考えを安心して表すことができるなど、情緒の安定した生活ができるようにする。
- (4) 食事、排泄、睡眠、休息など生理的欲求が適切に満たされ、快適な生活や遊びができるようにする。

「健康」

- (1) 食べ慣れないものや嫌いなものでも少しずつ食べようとする。
- (2) 排泄やその後の始末などは、ほとんど自分でする。
- (3) 嫌がるときもあるが、保育士が言葉をかけることなどにより午睡や休息をする。
- (4) 衣服などの着脱を順序よくしたり、そのときの気候や活動に合わせて適宜調節をする。
- (5) 自分で鼻をかんだり、顔や手を洗うなど、体を清潔にする。
- (6) 体の異常について、自分から保育士に訴える。
- (7) 危険のものや場所について分かり、遊具、用具などの使い方に気をつけて遊ぶ。
- (8) 進んで外で体を十分に動かして遊ぶ。
- (9) 遊具、用具や自然物を使い、様々な動きを組み合わせる積極的に遊ぶ。

「人間関係」

- (1) 保育士や友達などとの安定した関係の中で、いきいきと遊ぶ。
- (2) 自分のしたいと思うこと、してほしいことをはっきり言うようになる。
- (3) 友達と生活する中で、きまりの大切さに気づき、守ろうとする。
- (4) 保育士のいうことや友達の考えていることを理解して行動する。
- (5) 身の回りの人に、いたわりや思いやりの気持ちを持つ。
- (6) 手伝ったり、人に親切にすることや、親切にされることを喜ぶ。
- (7) 他人に迷惑をかけたら謝る。
- (8) 共同のものを大切にし、譲り合って使う。
- (9) 年下の子どもに親しみを持ったり、年上の子どもとも積極的に遊ぶ。
- (10) 地域のお年寄りなど身近な人の話を聞いたり、話しかけたりする。
- (11) 外国の人など、自分とは異なる文化を持った人の存在に気づく。

「環境」

- (1) 身近な動植物の世話を楽しんで行い、愛情を持つ。
- (2) 自然や身近な事物・事象に触れ、興味や関心を深める。
- (3) 身近にある公共施設に親しみ、関わることを喜ぶ。
- (4) 身近にある乗り物に興味や関心を示し、それらを遊びに取り入れようとする。
- (5) 自分のもの、人のものを知り、共同のものの区別に気づき、大切にしようとする。
- (6) 身近な大人の仕事や生活に興味を持ったり、それらを取り入れたりして遊ぶ。
- (7) 身近にある用具、器具などに関心を持ち、いじったり、試したりする。
- (8) 具体的な物を通して、数や量などに関心を持ち、簡単な数の範囲で数えたり比べたりすることを楽しむ。
- (9) 身の回りの物の色、形などに興味を持ち、分けたり、集めたりして遊ぶ。
- (10) 保育所内外の行事に楽しんで参加する。

「言葉」

- (1) 日常生活に必要なあいさつをする。

- (2) 話しかけられたり、問いかけられたりしたら、自分なりに言葉で返事をする。
- (3) 身の回りの出来事に関する話に興味を持つ。
- (4) 友達との会話を楽しむ。
- (5) 見たことや聞いたことを話したり、疑問に思ったことを尋ねる。
- (6) 保育士の話を親しみを持って聞いたり、保育士と話したりして、様々な言葉に興味を持つ。
- (7) 絵本や童話などを読み聞かせてもらい、イメージを広げる。

「表現」

- (1) 様々なものの音、色、形、手ざわり、動きなどに気づき、驚いたり感動したりする。
- (2) 友達と一緒に音楽を聴いたり、歌ったり、体を動かしたり、楽器を鳴らしたりして楽しむ。
- (3) 感じたこと、思ったことや想像したことなどを様々な素材や用具を使って自由に描いたり、作ったりすることを楽しむ。
- (4) 童話、絵本、視聴覚教材などを見たり、聞いたりしてイメージを広げ、描いたり、作ったり様々に表現して遊ぶ。
- (5) 作ったものを用いて遊んだり、保育士や友達と一緒に身の回りを美しく飾って楽しむ。
- (6) 身近な生活経験をごっこ遊びに取り入れて遊ぶ楽しさを味わう。

5 配慮事項

〔基礎的事項〕

- (1) 一人一人の子どもの平常の健康状態を把握し、異常に気づいたら優しく問いかけをし、子どもがその状態を話すことができるように配慮するとともに、必要に応じて、速やかに適切な対処をする。
- (2) 施設内の採光、換気、保温、清潔など環境保健に配慮する。
- (3) 子どもの気持ちを温かく受容し、個人差を考慮して、子どもが安定して活動できるように配慮する。

「健康」

- (1) 健康、安全など生活に必要な基本的な習慣は、一人一人の子どもと保育士の親密な関係に基づいて、日常生活の直接的な体験の中で身につくように配慮する。
- (2) 子どもの冒険心を大切にし、新しい運動や遊びに対する不安や恐れを取り除くなどして、いきいきとした活動が展開できるように配慮する。
- (3) 子どもの生活や経験と遊離した特定の運動や無理な技能の修得に偏らないように配慮する。

「人間関係」

- (1) 集団の活動に参加するときは、一人一人の子どもが、それぞれの欲求を満たすことができるよう配慮する。
- (2) 友達とのけんかを経験しながら、次第に相手の立場の理解が進み、時には自分の主張を抑制することによって、楽しく遊べることに気づくように配慮する。その際、保育士の優しいまなざしが向けられるようにすることが大切である。

「環境」

- (1) 動植物の飼育や栽培の手伝いを通して、それらへの興味や関心を持つようにし、その成長・変化などに感動し、愛護する気持ちを育てるようにする。
- (2) 家庭や地域の実態に即して、様々な経験ができるようにし、子どもの発見や驚きを大切にして、社会や自然の事象に関心を持つように配慮する。
- (3) 数、量、形などについては、直接それらを取り上げるのではなく、生活や遊びの中で子ども自身の必要に応じて、具体的に体験できるようにして数量的な感覚を育てるように配慮する。

「言葉」

- (1) 保育士との間や子ども同士で話す機会を多くし、その中で次第に聞くこと、話すことが楽しめるように配慮する。
- (2) 日常会話や絵本、童話、詩などを通して、様々な言葉のきまりや面白さ

などに気づき、言葉の感覚が豊かになるように配慮する。

「表現」

- (1) 子どものイメージが湧き出るような素材、玩具、用具、生活用品などを用意して、のびのびと表現して遊ぶことができるように配慮する。

保育士の言動は、子どもが美しいものを感じたり、よいものを選んだりすることに強い影響を及ぼすので、それに留意する。

- (2) 子ども同士の模倣や認め合いを大切にしながら、表現する意欲や創造性を育てるように配慮する。
- (3) 表現しようとする気持ちを大切に、生活や経験と遊離した特定の技能の修得に偏らないように配慮する。

第9章 5歳児の保育の内容

1 発達的主要な特徴

子どもは、この時期、日常生活の上での基本的な習慣は、ほとんど自立し、自分自身でできるようになり、そばで見えていても危なげがなくなり、頼もしくさえ思われてくる。また、運動機能はますます伸び、運動を喜んで行い、なわとびなどもできるようになる。

内面的にも一段と成長し、今までのように大人が「いけない」というから悪いのではなく、自分なりに考えて納得のいく理由で物事の判断ができる基礎が培われてくる。また、行動を起こす前に考えることもできるようになり、自分や他人を批判する力も芽生えてきて、「ずるい」とか「おかしい」など不当に思うことを言葉で表すようになる。手伝いなども、はっきりと目的を持って行うことが多くなり、しかもその結果についても考えが及ぶようになる。

好きでないことでも、少しは我慢して行い、他人の役に立つことがうれしく、誇らしく感じられるようにもなってくる。

この頃になると、より一層仲間の存在が重要になる。即ち、同じ一つの目的に向かって数人がまとまって活動するようになり、お互いが自分のやらなければならないことや、きまりを守ることの必要性が分かってきて、初めて集団としての機能が発揮されるようになってくる。このような集団の中で言葉による伝達や対話の必要性は増大する。これは自分の思いや考えをうまく表現し、他人の言うことを聞く力を身につける生きた学習の場になる。言葉を主体として遊んだり、さらには共通のイメージを持って遊んだりすることもできるようになる。また、自分と相手との欲求のぶつかり合いやけんかが起きても、今までのようにすぐに保育士に頼るのではなく、自分たちで解決しようとするようになってくる。つまり、お互いに相手を許したり、認めたりする社会生活に必要な基本的な能力を身につけるようになり、仲間の中の一人としての自覚や自信が持てるようになる。

2 保育士の姿勢と関わりの視点

毎日の保育所生活を通して、自主性や自律性が育つ。更に集団での活動も充実し、きまりの意味も理解できる。また、大人の生活にも目を向けることができる。社会性がめざましく育つことに留意しながら、子どもの生活を援助していくことが大切である。

3 ねらい

- (1) 保健的で安全な環境をつくり、快適に生活できるようにする。
- (2) 一人一人の子どもの欲求を十分に満たし、生命の保持と情緒の安定を図る。
- (3) 食事をするものの意味が分かり、楽しんで食事や間食をとるようにする。
- (4) 午睡など適切な休息をさせ、心身の疲れを癒し、集団生活による緊張を緩和する。
- (5) 自分でできることの範囲を広げながら、健康、安全など生活に必要な基本的習慣や態度を身につける。
- (6) 安全や危険の意味やきまりが分かり、危険を避けて行動する。
- (7) 様々な遊具や用具を使い、複雑な運動や集団遊びを通して体を動かすことを楽しむ。
- (8) 周りの人々に対する親しみを深め、集団の中で自己主張したり、また、人の立場を考えながら行動する。
- (9) 異年齢の子どもたちと遊ぶ楽しさを味わう。
- (10) 身近な社会や自然の環境と触れ合う中で、自分たちの生活との関係に気づき、それらを取り入れて遊ぶ。
- (11) 日常生活に必要な事物を見たり、扱ったりなどして、その性質や存在に興味を持ったり、数、量、形などへの関心を深める。
- (12) 様々な機会や場で活発に話したり、聞いたりして、生活の中で適切に言葉を使う。
- (13) 絵本、童話、視聴覚教材などを見たり聞いたりして、その内容や面白さを楽しみ、イメージを豊かに広げる。
- (14) 身近な社会や自然事象への関心が高まり、様々なものの面白さ、不思議

さ、美しさなどに感動する。

- (15) 感じたことや思ったこと、想像したことなどを自由に工夫して、表現する。

4 内容

〔基礎的事項〕

- (1) 一人一人の子どもの平常の健康状態や発育・発達状態を把握し、異常を感じる場合は速やかに適切な対応をする。また、子どもが自分から体の異常を訴えることができるようにする。
- (2) 施設内の環境保健に十分に留意し、快適に生活できるようにする。
- (3) 一人一人の子どもの気持ちや考えを理解して受容し、保育士との信頼関係の中で、自分の気持ちや考えを安心して表すことができるなど、情緒の安定した生活ができるようにする。
- (4) 食事、排泄、睡眠、休息など生理的欲求が適切に満たされ、快適な生活や遊びができるようにする。

「健康」

- (1) 体と食物の関係に関心を持つ。
- (2) 排泄の後始末を上手にする。
- (3) 午睡や休息を自分から進んでする。
- (4) 自分で衣服を着脱し、必要に応じて衣服を調節する。
- (5) うがい、手洗いの意味が分かり、体や身の回りを清潔にする。
- (6) 体の異常について、自分から保育士に訴える。
- (7) 危険なものに近寄ったり、危険な場所で遊ばないなど、安全に気をつけて遊ぶ。
- (8) 積極的に外で遊ぶ。
- (9) 様々な運動器具に進んで取り組み、工夫して遊ぶ。
- (10) 友達と一緒に様々な運動や遊びをする。

「人間関係」

- (1) 保育士や友達などとの安定した関係の中で、意欲的に遊ぶ。

- (2) 簡単なきまりをつくり出したりして、友達と一緒に遊びを発展させる。
- (3) 自分の意見を主張するが、相手の意見も受け入れる。
- (4) 友達と一緒に食事をし、食事の仕方が身に付く。
- (5) 友達への親しみを広げ、深め、自分たちでつくったきまりを守る。
- (6) 友達への思いやりを深め、一緒に喜んだり悲しんだりする。
- (7) 人に迷惑をかけないように人の立場を考えて行動しようとする。
- (8) 共同の遊具や用具を譲り合って使う。
- (9) 異年齢の子どもとの関わりを深め、思いやりやいたわりの気持ちを持つ。
- (10) 地域のお年寄りなど身近な人に感謝の気持ちを持つ。
- (11) 外国の人など自分とは異なる文化を持った様々な人に関心を持つようになる。

「環境」

- (1) 身近な動植物に関心を持ち、いたわり、世話をする。
- (2) 自然現象が持つ、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気づく。
- (3) 身近な公共施設や交通機関などに興味や関心を持つ。
- (4) 近隣の生活に興味や関心を持ち、人々が様々な営みをしていることに気づく。
- (5) 身近にいる大人が仕事をしている姿を見て、自らも進んで手伝いなどをしようとする。
- (6) 自然や身近な事物・事象に関心を持ち、それを遊びに取り入れ、作ったり、工夫したりする。
- (7) 身近な用具、器具などに興味を持ち、その仕組みや性質に関心を持つ。
- (8) 身近な物を大切に扱い、自分の持ち物を整頓する。
- (9) 生活の中で物を集めたり、分けたり、整理したりする。
- (10) 簡単な数の範囲で、物を数えたり、比べたり、順番を言ったりする。
- (11) 生活の中で、前後、左右、遠近などの位置の違いや時刻、時間などに興味や関心を持つ。
- (12) 保育所内外の行事に喜んで参加する。
- (13) 祝祭日などに関心を持ち生活に取り入れて遊ぶ。

「言葉」

- (1) 親しみを持って日常のあいさつをする。
- (2) 話しかけや問いかけに対し適切に応答する。
- (3) 身近な事物や事象などについて話したり、名前や日常生活に必要な言葉を使う。
- (4) 人の話を注意して聞き、相手にも分かるように話す。
- (5) 考えたこと経験したことを保育士や友達に話して会話を楽しむ。
- (6) 童話や詩などを聞いたり、自ら表現したりして、言葉の面白さや美しさに興味を持つ。
- (7) 絵本、童話などに親しみ、その面白さが分かって、想像して楽しむ。
- (8) 生活に必要な簡単な文字や記号などに関心を持つ。

「表現」

- (1) 様々な音、形、色、手ざわり、動きなどを周りのものの中で気づいたり見つけたりして楽しむ。
- (2) 音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして、音色の美しさやリズムの楽しさを味わう。
- (3) 様々な素材や用具を利用して描いたり、作ったりすることを工夫して楽しむ。
- (4) 身近な生活に使う簡単なものや様々な遊びに使うものを工夫して作る。
- (5) 友達と一緒に描いたり、作ったりすることや身の回りを美しく飾ることを楽しむ。
- (6) 自分の想像したものを体の動きや言葉などで表現したり、興味を持った話や出来事を演じたりして楽しむ。

5 配慮事項

〔基礎的事項〕

- (1) 一人一人の子どもの平常の状態を把握し、異常に気づいたら優しく問いかけをし、子どもがその状態を話すことができるように配慮するとともに、必要に応じて速やかに適切な対処をする。
- (2) 施設内の採光、換気、保温、清潔など環境保健に配慮する。

- (3) 子どもの気持ちを温かく受容し、保育所生活の様々な場面で、子どもが安定し、かつ自己を十分に発揮して活動できるように配慮する。

「健康」

- (1) 健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度が身につく、自分の体を大切にしようとする気持ちが育ち、自主的に行動することができるように配慮する。
- (2) 友達との遊びを通して、体を使って遊ぶことを楽しめるように配慮する。
- (3) 子どもの生活や経験と遊離した特定の運動や無理な技能の修得に偏らないように配慮する。

「人間関係」

- (1) 一人一人の子どもが友達と関わる中で、個人や社会生活に必要な習慣や態度が身につくように配慮する。
- (2) グループを作る場合は、様々な場面で自分を主張でき、相手の立場を認め、他人のよいところを見つける力が育つように配慮する。
- (3) 集団生活は、一人一人が生かされ認められるよう、また、子どもが相互に必要な存在であることを実感できるように進められることが必要である。

「環境」

- (1) 飼育・栽培を通して、動植物がどのようにして生きているのか、育つのか興味を持ち、生命が持つ不思議さに気づくようにする。
- (2) 動植物と自分たちの生活との関わりに目を向け、それらに感謝やいたわりの気持ちを育てていくようにする。
- (3) 生活の様々な面を通して、自然や社会の事象に対して、好奇心や探索心を満たすことができるように配慮する。
- (4) 身近にいる大人の仕事をみて、自分の生活と大切な関わりのあることに気づくように配慮する。
- (5) 日常生活の中で子ども自身の具体的な活動を通して、数、量、形、位置、時間などに気づくように配慮する。

「言葉」

- (1) 個人差を考慮して、見たこと、聞いたこと、感じたこと、考えたことを言葉で表現できる雰囲気をつくるように配慮する。
- (2) 文字や記号については、日常生活や遊びの中で興味を持つよう、用具、遊具、視聴覚教材などの準備に配慮する。
- (3) 絵本や童話などの内容を子どもが自らの経験と結びつけたり、想像をめぐらせたりしてイメージを豊かにできるよう、その選定や読み方に十分な配慮をする。

「表現」

- (1) 表現しようとする意欲を高め、結果にとらわれず、一人一人の子どもの創意工夫を認め、創造的な喜びが味わえるように配慮する。
- (2) 子どもの考えや子ども同士の認め合いを大切に、みんなで一緒に表現することの喜びを味わうことができるように配慮する。
- (3) 表現しようとする気持ちを大切に、生活や経験と遊離した特定の技能の修得に偏らないように配慮する。